

付録1. 東京学芸大学民族植物学研究室が関わる国内外の学術調査の記録

東京学芸大学は文武省令による旧講座制、学科目制ではなく、課程制におかれていた。国立大学法人化後は大講座・分野および課程・専攻と称するようになった。したがって、慣例的に、学問分野で研究室を呼称していない。たとえば、個人名で〇〇研究室と称している。しかし、私はこのことに賛成でなかった。

本来は、大学なのだから、学問分野名で△△研究室と呼ぶべきである。研究室は学問分野を学ぶために、研究者、教職員、院生や学生によ

て構成されるチームであるので、個人名で呼ぶのはおかしい。私は「木俣研究室」とは呼んでほしくなかったので、「民族植物学研究室」と称することを、所属学生に求めた。

大学の幹部からは、民族植物学研究室は存在しないと言われてきたが、形式上そのとおりであり、大学の方針に逆らっても、学問を希求する学生・研究者として研究分野で呼称してきた。40年間運営してきた民族植物学研究室での海外調査研究リストを次に残しておく。

ユーラシアにおける雑穀の起源と伝播に関する学術調査

西暦	地域	調査隊	備考
1974～現在	日本（沖縄から北海道までの各地）	東京学芸大学および京都大学学術調査	科学研究費、東急環境浄化財団、住友財団、創設法人森とむらの会などの助成
1983	インド（ハリヤナ州）、ネパール（カトマンズ、ダラン、ダンクッタ、ナムチェなど）	東京女子大学ネパール学術調査隊	第2次（9月～11月）、科学研究費
1985	パキスタン（北西辺境州）、インド（カルナタカ、アンドラプラデシュ、タミールナドゥの各州）	京都大学インド学大講座学術調査隊	第1次（9月～10月）、科学研究費
1986	韓国（光州）	東京学芸大学・大阪府立大学合同学術調査隊	（9月）
1987	インド（ジャムム・カシミール、西ベンガル、ビハール、オリッサ、アッサムの各州）、パキスタン（シンド）	京都大学インド学大講座学術調査隊	第2次（9月～11月）、科学研究費
1989	パキスタン（アザッド・カシミール）、インド（カルナタカ、マディヤプラデシュ、マハラシュトラ）	京都大学インド学大講座学術調査隊	第3次（9月～10月）、科学研究費
1993	中央アジア5カ国（ウズベキスタン、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、トルクメニスタン）、ロシア	東京学芸大学中央アジア学術調査隊	JTクロスカルチャー大賞助成、科学研究費
1995～1998	インド（カルナタカ、アンドラプラデシュ、タミールナドゥ、オリッサ、ヒマチャルプラデシュ、ウッタルプラデシュの各州、ウズベキスタン、中国（河北省）	文部省在外研究員（農学大学客員教授）	農学大学JAS、全インド雑糧改良財団（1995年9月～1997年8月）
2001	インド（カルナタカ州、オリッサ州）	東京学芸大学学術調査隊	（9月～10月）
2004	中国（内モンゴル・シリンボト）	東京学芸大学学術調査隊	（8月）
2005～2006	イギリス（ユーラシアの雑穀のさく葉標本および考古学文献調査）	研究者志願者（ケンブリッジ大学客員教授）	王立キュー植物園、ケンブリッジ大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学（2005年8月～2006年3月）
1983～現在	ヨーロッパ各国（ドイツ、デンマーク、オーストリア、オランダ、ベルギー、イギリス、フランスなど）、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、タイ	その他（ラジャバトプラナコン大学客員教授）	華全や旅行などの依頼および観光